2018 年度 小委員会活動成果報告

（2019 年 2 月 10 日作成）

小委員会名	比較居住文化研究小委員会	**主 査 名**：前田昌弘 **就任年月**：2016 年 4 月
所属本委員会 （所属運営委員会）	建築計画委員会（住宅計画運営委員会）	**委員長名**：広田　直行 **主 査 名**：清水　郁郎
設　置　期　間	2016 年 4 月　　～　　2020 年 3 月	
設　置　目　的 各年度活動計画 （箇条書き）	人・物・情報が世界規模で行きかう現在、それらの要因に影響を受け、居住の質も劇的に変化している。こういった状況下、フィールドワークによる居住文化の研究および、それをもとにした多様な展開を推進し、建築学の発展に寄与する。各年度とも以下の活動を行う。 1. 地域に根ざした計画手法の集積および、その研究 2. フィールドワークによる居住文化研究に関する情報の発信 3. フィールドワーク事例の見学会の開催 4. フィールドワークを主体とした研究を行ってきた研究者による、研究の視座および方法論を紹介する書籍の刊行準備 5. 上記目的にそった拡大小委員会および公開研究会の開催	
委員構成 （委員名（所属））	**委員公募の有無**：無 主査　前田昌弘（京都大学大学院工学研究科） 幹事　栗原伸治（日本大学生物資源科学部） 幹事　本間健太郎（東京大学生産技術研究所） 委員　アルマザン・ホルヘ（慶應義塾大学理工学部） 稲垣淳哉（エウレカ／早稲田大学芸術学校） 上北恭史（筑波大学大学院芸術系） 内海佐和子（室蘭工業大学大学院工学研究科） 北原玲子（日本女子大学） 小林広英（京都大学大学院地球環境学堂） サキャ・ラタ（ハウジングアンドコミュニティ財団） 清水郁郎（芝浦工業大学建築学部） 高田静（Hot Butter Design Office） 那須聖（東京工業大学大学院総合理工学研究科） 濱定史（山形大学工学部） 山田協太（筑波大学芸術系）	
設置 WG （WG 名：目的）	なし	
2018 年度予算	135,000 円	**ホームページ公開の有無**：有 **委員会 HP アドレス**： http://news-sv.aij.or.jp/keikakusub/s25/index.html

項　　目	自己評価
委員会開催数	4 回（年度内計画を含む）
刊行物 （シンポジウム資料等は除く）	１．「建築フィールドワークの系譜 ―先駆的研究室の方法論を探る」，昭和堂，2018 年 12 月刊行
講習会	１．なし

催し物 （シンポジウム･セミナー等） *能力開発支援事業委員会承認企画	１．拡大委員会「フィールドワークの未来形」（於：建築会館、参加者数 10 名） ２．拡大委員会「受け継がれるフィールドワーク　－ 拡張と実践への展開－ 」（於：建築会館、参加者数 19 名） ３．シンポジウム「幻の建築家たちの教え」（於：建築会館ホール、2019 年 3 月 6 日開催予定）
大会研究集会	１．なし
対外的意見表明・パブリックコメント等	１．なし
目標の達成度 （当初の活動計画と得られた成果との関係）	下記の通り、当初の活動計画における目標は概ね達成されている。 １．拡大委員会、シンポジウムの企画・実施等を通じてフィールドワークおよび居住文化研究について活発な議論を行い、知見をさらに深めた。 ２．書籍「建築フィールドワークの系譜」を刊行した。また、以下の拡大委員会、シンポジウムを企画・実施し、同書籍で取り上げた、建築フィールドワークの先駆者である建築家・研究者とのディスカッションを行い、建築設計・計画の方法論についてさらに議論を深めることができた。 　拡大委員会「受け継がれるフィールドワーク－ 拡張と実践への展開－ 」：畑聰一氏（芝浦工業大学名誉教授）とその門下生たち（清水郁郎氏、阿部拓也氏）を講師として招き、同氏が建築フィールドワークを始めたきっかけ、研究室で継承・発展された内容等について活発な議論を行った。 　シンポジウム「幻の建築家たちの教え」：建築家である原広司氏、古谷誠章氏を講師として招き、また、当委員会委員をモデレータとして布野修司氏、陣内秀信氏といった建築フィールドワークの先駆者である研究者を交えた議論を行い、建築フィールドワークの今日的意味について理解を深める予定である。 ３．拡大委員会「建築フィールドワークの未来形」を開催し、「領域の拡張」、「協働」、「実践への展開」等をキーワードとして建築フィールドワークの発展の可能性を展望し、次期刊行物の企画についてのアイデアを具体化した。議論の成果は次期刊行物「建築ソーシャルデザイン－ 建築フィールドワークの拡張と実践への展開（仮）」企画書としてまとめ、学会に提出後、承認された。
委員会活動の問題点・課題	活動についての情報発信がやや弱いため、小委員会 HP の内容をより充実させる必要がある。